養成校と実習指導者が協同で行う ルーブリック検証の試み

——内容分析を用いて使用者の感想の分析から課題と改善策を明らかにする——

*Physical Therapy School and Clinical Training Facilities Cooperate
in Verifying Rubric:
Analysis of User's Feedbacks by Content Analysis to Clarify Tasks and Improvements*

山下 喬之^{1,2)} 四元 祐子³⁾ 松野下 信三³⁾ 長津 秀文¹⁾

TAKAYUKI YAMASHITA, RPT^{1,2)}, YUKO YOTSUMOTO, HSM, OTR³⁾, SHINZO MATSUNOSHITA, OTR³⁾,
HIDEFUMI NAGATSU, RPT¹⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, Kagoshima Medical Professional College: 5417-1 Aza Utoguchi, Hirakawa-cho,
Kagoshima-shi, Kagoshima 891-0133, Japan TEL +81 99-261-6161 E-mail: pt.yamashita@harada-gakuen.ac.jp

²⁾ Department of Education, Graduate School of Kagoshima University

³⁾ Department of Occupational Therapy, Kagoshima Medical Professional College

Rigakuryoho Kagaku 33(4): 675-682, 2018. Submitted Feb. 9, 2018. Accepted Apr. 1, 2018.

ABSTRACT: [Purpose] The present study was undertaken in order to obtain objective knowledge for revising rubric style. [Subjects and Methods] In the study, samples from 189 clinical training facilities were gathered. The questionnaire reply form used in this part of this research was free descriptions about feedbacks on using rubric, and the replies were subjected to content analysis. [Results] Fifty-four context units and 98 record units were extracted from the feedbacks. From the results, we were able to form 14 new sub categories and four more categories in rubric style. [Conclusion] The results of the content analysis explain that the feedbacks showed rubric's advantages, issues, improvement points, and future possibilities. The results of this study indicate that rubric can be a proper performance evaluation method. This study will be of value in the field of developing and revising very practical rubrics for authors.

Key words: rubric, clinical education, performance evaluation method

要旨:〔目的〕ルーブリックを使用した実習指導者の感想を内容分析を用いて検証し、様式改訂の際に必要な客観的な知見を得ることを目的とする。〔対象と方法〕臨床実習指導者189名を対象に、ルーブリックを使用した感想を問う質問紙への回答を依頼し、自由記述欄に記述された内容を対象として、内容分析を行った。〔結果〕集約した結果より、54の文脈単位と、98の記録単位が抽出され、14のサブ・カテゴリから、さらに4つのカテゴリが形成された。〔結語〕内容分析の結果から、ルーブリックの利点、課題、具体的な要改善箇所、今後の可能性に関する知見を得ることができた。本研究の結果は、今後実用性の高いルーブリックへと改訂を行う際の有益な根拠の一つとなると考えている。

キーワード: ルーブリック, 臨床実習成績, 理学療法士教育

¹⁾ 学校法人原田学園 鹿児島医療技術専門学校 理学療法学科: 鹿児島県鹿児島市平川町字宇都口5417-1 (〒891-0133) TEL 099-261-6161

²⁾ 国立大学法人 鹿児島大学大学院 教育学研究科 教育実践総合専攻

³⁾ 学校法人原田学園 鹿児島医療技術専門学校 作業療法学科

I. はじめに

ルーブリックとは、ある課題についてできるようにしてもらいたい特定の事柄を配置するための道具¹⁾のことで、パフォーマンス評価の観点から評価基準や到達度が具体的な表現で可視化できる教育評価ツールとされている²⁾。ルーブリックは、様々な教育分野において広く普及し、医歯薬系の大学における臨床実習の評価への活用実践³⁾をはじめ、看護師養成課程やリハビリテーション関連職種の養成課程においてもその注目度は高い。特に近年では、学内教育や臨床実習教育（以下、実習教育）それぞれの分野において、ルーブリックの活用した教育実践に関連する報告も数多くなっている⁴⁻⁶⁾。また、何らかの教育実践にルーブリックを導入している機関は、学習の成果に係る評価やそれに関する基準の明示化に関する法令の整備⁷⁾などの影響で、教育目標や成績評価基準の明確化に努めることが一般的となり、ルーブリックの公開にも積極的である。

理学療法士養成課程における実習教育は、理学療法学生（以下、学生）が、理学療法士としての基本的技能を全般的にわたって養うために、患者に対する理学療法の過程を経験することで知識・技術を深め、統合することを目的に行う⁸⁾。しかし、その成績評価の特徴は指導者個人の判断にゆだねられてしまうことが多いとされ、個別教育であるが故の客観性や公平性の確保の困難さ⁹⁾や、合否判定に偏る総括的評価に重きが置かれ、学生を形成的に評価するには不十分な状態である¹⁰⁾とされている。これらは、根拠に欠ける学生評価といった実習教育における「課題」として取り上げられることが多い。また、金山ら¹¹⁾は「養成校と実習指導者の間に、教育評価に対する意識に大きな差を生むことは、実習教育を通して学生の能力を育むための教育活動中に相互理解を図ることが困難となる」と実習教育における教育評価の課題を指摘している。筆者らも同様に、実習成績評価の客観性や公平性に関する課題や、養成校と実習施設との教育連携の不十分な在り方に対しては、実習教育全体の質の低下を招くことになりかねない重要な課題として捉えている。

また、近年では、よりよい実習教育が行われる指導体制を目指すために、実習指導者自身や実習施設が教育的視点を踏まえて指導方法を学ぶ重要性¹²⁾や、実習指導者と養成校との連携強化¹³⁾を推奨する提言が数多くなされ、養成校と実習施設が独立してのぞむ教育的取り組みのみならず、実習指導者の意見を取り入れたかたちでの学内教育と実習教育を結ぶ必要性が見直されるようになってきている。

本校では、これまでに述べた臨床実習における教育評価の課題に加え、養成校における養成型態自体や実習形態の違い、社会的ニーズの多様化などの理学療法士養成

課程自体の多様化した背景¹⁴⁻¹⁶⁾が生んだ複雑な教育の風土を、パフォーマンス評価の概念を取り入れた教育評価の観点から課題の解決の可能性を見出し、ルーブリックを導入した。運用中のルーブリック¹⁷⁾は、理学療法士教育ガイドライン1版¹⁸⁾と臨床実習教育マニュアル第5版¹⁹⁾に基づき開発され、15の評価項目を4段階の尺度で評定し、評価基準を記すための記述語が書かれた枠の余白には、評価項目に関する指導内容を自由に記述できるように余白が確保されている。ルーブリックの開発は、教授者固有の教育方法や対象学生の多様さなどから、それらのニーズに適合させた独自の作成が好ましく、加えてその作成には関係者を加えて実施することが有益であるとされている²⁰⁾。そのため、養成校教員16名に加え、本校の実習教育に理解を示している実習指導者20名（施設数12件）に依頼した試験運用の結果と、それらに対する意見を合わせた多者間協議のもとに行った。現在、14ヵ月の開発期間と3年間の運用期間を経て、実習成績評価におけるルーブリックの実用性を立証するために、様式の信頼性と妥当性の検証を行う段階にある。

今回の研究では、協同で開発したルーブリックを成績評価様式として使用した実習指導者にその使用感を記述してもらい、それらを養成校が質的な手法を用いて検証する取り組みが教育連携の一環となることに意義を見出している。そして、分析の結果として得られた知見から、様式の構成から基準の内容、運用の方法までを含め、臨床実習の成績評価様式として妥当に構成されているかを問い直し、今後の改訂に役立てることを目的とする。

II. 対象と方法

1. 対象

調査の対象者は、平成28年3月に開催された、臨床実習指導者会議（以下、指導者会議）に出席した実習指導者189名（平均臨床経験年数11年、標準偏差5.6年）で、参加者の所属内訳は、鹿児島県138名、宮崎県26名、熊本県14名、佐賀県1名、長崎県4名、大分県3名、沖縄県2名、静岡県1名であった。指導者会議への参加資格は特に規定していないが、臨床実習施設（以下、実習施設）の理学療法士責任者や実習教育担当責任者がその大半を占める。本研究は、鹿児島医療技術専門学校倫理審査委員会の承認を得たものである（倫理審査番号：17020）。

2. 方法

本学科の指定する実習施設は全て学外の機関で、その総数は、10県に240施設（平成29年度現在）を超え、養成校がルーブリックを使用した全ての実習指導者を対象に、それぞれの感じた使用感や意見の全てを聴取することには困難が伴う。したがって、指導者会議参加者を

対象に質問紙への回答を依頼する形式の調査方法を選定した。質問紙は、A4サイズ1枚の様式に9項目の設問と自由記述欄で構成し、設問の内容は、ルーブリック作成時における留意点¹⁾と、養成校がルーブリックの評価項目と各種基準の開発を行う際に留意した開発の要点¹⁷⁾を基準に考案した(表1)。回答直前には対象者向けに、ルーブリック評価の概要の再確認と、回答を誘導することとしない配慮を行う目的で、ルーブリックを導入した趣旨や使用方法の再確認と、実際に指導者の記入した様式の一部を紹介するなどの具体的な実用実績の報告を中心としたプレゼンテーションに加え、今回の調査の趣旨と回答方法の説明までを行った。質問紙はあらかじめ指導者会議前に実習指導者の座席の机の上に配布しておき、調査の趣旨に同意した者のみ提出するという形式をとった。回答には、各設問の問いに対し、そう思う(4点)、どちらかといえばそう思う(3点)、どちらかといえばそう思わない(2点)、そう思わない(1点)の4段階の判定と、使用感の自由記述で、20分間を確保した。

本研究における分析では、実習指導者が自由記述欄に記述した内容を中心に取り扱い、検証方法は、言語的に記述されたものを体系的に定量化し、数量的にデータ化するという特徴を持つ Berelson の内容分析の手法²¹⁾を用いた。

分析は、はじめに研究の目的である問い「ルーブリックの使用者となる実習指導者は、新たに導入した様式を使用してどう感じたか。」に対する回答文「ルーブリックの使用者となる実習指導者は、新たに導入した様式を

使用して○○○と感じた。」を設定し、自由記述欄に実習指導者の記述した内容全体を一文脈単位として、空欄○○○にあてはまる記述部分を記録単位として抽出した。次に、記録単位から、内容や意味が類似したり一致したりする記録単位を探し、それらをサブ・カテゴリ化し、さらにサブ・カテゴリに共通する内容と意味を導き出し、カテゴリの内容を忠実に反映した表現を用いた命名でカテゴリ化を行った。この際は、同一記録単位群の意味内容の類似性によって分析を進め、常に分析過程全体を視野に入れておく必要があるため、全ての記録単位を並べた一覧を模造紙で作成し、紙面上における分類作業を行い、記録単位同士の関連性を外化させながら分析を進めた。

記録単位の出現率(%)は分母を全ての記録単位数、分子をそれぞれのサブ・カテゴリとカテゴリに分類した記録単位数として割合を算出した。また、分類の信頼性の確保には、研究の目的に沿った記録単位が抽出されているかを研究者間で協議することと、ルーブリックを用いた実習成績評価の趣旨理解がなされているが、直接的に分類作業に携わらなかった第三者の理学療法学科管理職教員(臨床経験16年、教職員経験6年)、作業療法学科管理職教員(臨床経験7年、教職員経験16年)の2名に独立したカテゴリ化を依頼した。抽出されたカテゴリの信頼性検証には、舟島らの推奨する Scott.W.A の式²²⁾を用いてカテゴリ判断の一致率を算出し、信頼性確保の基準は、先行研究等を参考に一致率70%以上²²⁾を信頼性が確保されていると判断した。

表1 質問紙の様式と設問

各項目
1. 成績を評価する際に、ルーブリックを参考にして評価項目ごとの具体的な到達目標を確認することができた
2. ルーブリックによる表記は、評価尺度ごとの到達度が理解しやすかった
3. 実習指導に臨むにあたり、ルーブリックを参考にして目標と到達度を確認することができた
4. 自らの指導を振り返り、学生の課題解決のための指導の具体策を考える参考になった
5. 学生に自己評価をさせ、指導者自らの評価結果とを対比して考えることができた
6. ルーブリックによる評価結果は、学生が次の到達目標へ向けた課題がわかりやすかった
7. ルーブリックは、以前よりも学生が公平に評価されやすい成績評価様式だ
8. ルーブリックは、学生が指導者の評価結果を受容しやすい様式だ
総合項目
9. 以前の成績報告書よりもルーブリックによる成績評価の方が総合的に良い
自由記述欄(ルーブリックを使用した感想、ご意見などをお書きください)

III. 結 果

配布した質問紙 189 部のうち、ループリックの使用経験があり、同意が得られて回収できた質問紙は 158 部で、自由記述がない、今回の内容分析に適さない回答をしたなどの 2 部を除き、82.5%の有効回答率であった。自由記述欄の記述内容は、延べ 54 単位の文脈単位から 110 単位の記録単位が抽出され、意味内容が類似しないもの 12 単位を除外した 98 単位を集約した。

分類の結果、14 のサブ・カテゴリと、4 のカテゴリが抽出され（表 2）、抽出された 4 つのカテゴリをそれぞれ「1. 具体的な表現で可視化された様式には、客観性、公平性、利便性などの『利点』が多数存在する」（以下、カテゴリ 1）、「2. 客観性の不十分さと、使用する際の不慣れや戸惑いなどの『課題』が存在する」（以下、カテゴリ 2）、「3. 様式改訂の勧めと『具体的な要改善箇所』が存在する」（以下、カテゴリ 3）、「4. 内省への応用や、斬新な活用法は実習教育に新たな『可能性』をもたらす」（以下、カテゴリ 4）と命名した。

まず、「カテゴリ 1」は、43 単位の記録単位と 7 つのサブ・カテゴリから構成され、ループリック導入の趣旨でもある、目標と各種基準を具体的な表現で可視化することによる実習成績報告書の客観性、公平性、利便性などを含む様式の利点を、使用者である実習指導者が感じたことを意味する。

次に、「カテゴリ 2」は、34 単位の記録単位と 3 つのサブ・カテゴリから構成され、実際に実習指導者が学生の実習成績評価にループリックを使用して感じた、戸惑いや曖昧な点などの、ループリックに対する課題がまとめられている。

「カテゴリ 3」は、12 単位の記録単位と 2 つのサブ・カテゴリから構成され、実習成績報告書の様式にループリックを導入し、目標や基準などの表記を具体的な表現で可視化した様式で運用したからこそ顕在化した「様式」・「基準内容」に関した、使用者の感想からよみとける具体的な改善箇所と提案がまとめられている。

最後の、「カテゴリ 4」は、9 単位の記録単位と 2 つのサブ・カテゴリから構成され、実習指導者が実際の学生指導に活用して、ループリック様式を振り返りへの応用ができたことや、先験的な使用法を試みて感じたことからよみとける、これからのループリックの可能性をまとめた。

各命名は、サブ・カテゴリの共通の内容から検討して導き出し、第三者に協力を依頼して検証した Scott.W.A の式による一致率は、それぞれ 86.5%、86.4%となり、カテゴリの信頼性を確保していた。

IV. 考 察

近年、実習教育の在り方の一つに、養成校と実習施設との連携強化が再重要視されるようになってきている¹³⁾。本校では、臨床実習ループリックの開発から導入、運用実践を踏まえた様式の検証と改定を行うにあたり、開発者側である養成校と使用者側である実習指導者間において、ループリックを用いた実習成績評価に対する意識の共有と理解が重要であると考えた。今回の研究では、実習成績評価の様式としてループリックを使用した実習指導者の感想を要素として集約し、結果として抽出された課題やそれらに対する改善案として得られた知見から、質的な手法を用いて分析を行い、様式の改訂を行うにあたっての妥当な根拠を得ることを目的としている。

まずカテゴリ 1 は、実習指導者の感じたループリックの「利点」をまとめたカテゴリとした。ループリックの使用者である実習指導者は、学生の状態を明確な表現で可視化することができ、実習成績評価様式としても使いやすく、結果の公平性の高さも担保される様式であると感じていることがわかった。その他にも成績評価の記入時のみならず、実習教育を進める上でループリックを活用して「学生の成長度の可視化が容易であったと感じた」や、実習を通し「ループリックを指導ツールとして活用することで学生と実習指導者間での相互理解が図れた」などの、形成的評価の意味を含んだ結果も得られた。これらは、本校と実習施設間における協同したループリックの運用から、明確な表現で可視化した各基準が評価の公平性や結果の客観性につながるという養成校が開発時に留意した要点¹⁷⁾を、実習指導者もループリックの「利点」として感じていることを明らかにした。このことは、養成校と実習指導者との実習成績評価に対する意識や方向性に共通点が存在し、さらには、双方のコンセンサスがとれているとも捉えることが可能で、結果としてループリックの運用は養成校と実習指導者間における相互理解を深めることにつながったと解釈できる。

また、使用者である実習指導者は、以前の 5 段階評価の様式と比較して、ループリックは容易に使用でき、かつ客観的な評価結果となるような、使いやすく、かつ実用的な様式となったことに「利点」を感じていることなどからも、様式の「利点」を整理したことは、今後のループリック運用継続への前向きな根拠の一つとなった。

次にカテゴリ 2 は、カテゴリ 1 の利点とは対照的な、ループリックの「課題」をまとめた。開発段階当初より、実習指導者を中心とした多くの第三者を交え、学内外で 1 年を超えて検討を繰り返したにもかかわらず、会議に参加した実習指導者の回答結果には、未だ記入のしづらさや評価基準の曖昧さ、判断の際の迷いなどの指摘が存在した。サブ・カテゴリは、「見慣れない様式と新しい記入方法は使用者に不便や戸惑いを生じさせる」や「定

表2 ルーブリックの使用者となる実習指導者は、新たに導入した様式を使用してどう感じたか

カテゴリ (記録単位数・出現率)	サブ・カテゴリ (記録単位数・出現率)	具体的内容例
具体的な表現で可視化された様式には、客観性、公平性、利便性などの「利点」が多数存在する (43・43%)	目標や基準の表記が具体的な表現で記載されている (14・14%)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生がどこを目標にすればよいかわかりやすい ・到達目標が具体的な表現で掲示されており評価を行いやすい ・基準や評価結果を学生にはっきり伝えられる
	学生の状況や実施した指導内容の記述がしやすい (8・8%)	<ul style="list-style-type: none"> ・確認が楽 ・余白に自由にコメントが書けるところがいい ・評価の記載時間の短縮ができる
	実習指導者と学生間での相互理解が深まる (5・5%)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生と指導者が課題を共通認識できる ・自己評価、指導者評価と照らし合わせて話し合うことで、学生の良い点がわかりやすい ・お互いの考えのずれの認識ができる
	好感の持てる成績報告書様式である (5・5%)	<ul style="list-style-type: none"> ・成績評価様式として良い ・ルーブリックでの評価はいい
	学生の変化や成長を可視化できる (4・4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の成長度を見るには良い ・初期評価と最終評価があるような長期間の実習では学生の行動変化をとらえやすい
	従来の成績報告書の様式と比較して改善した (4・4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・以前の評価方法より細かくなった所がいい ・これまでの評価方法より評価しやすい
	評価結果に差が出にくく公平性がある (3・3%)	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者によって記載の質に大きな差が出ないのは良い ・学生の成績評価法として公平性がある
客観性の不十分さと、使用する際の不慣れや戸惑いなどの「課題」が存在する (34・34%)	見慣れない様式と新しい記入方法は、使用者に不便さや戸惑いを生じさせる (17・17%)	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れるまで戸惑った ・1つの枠に複数の要素（例えば、情報収集・管理・伝達）がある場合どの枠に評価を付けるか迷う ・書く過程において時間を要する
	定められている目標や基準に曖昧な表現が存在する (12・12%)	<ul style="list-style-type: none"> ・尺度間で差異のない表現の項目もある ・評価基準内容の文章が似ていて判断に迷う箇所がある ・基準内容は受け取り方次第でその差が大きくなる
	運用の実践が、ルーブリックの隠れた課題を顕在化させた (5・5%)	<ul style="list-style-type: none"> ・短期間での実習ではルーブリックを使用した成長度の評価はしにくい ・評価を誘導されている
様式改訂の勧めと「具体的な改善箇所」が存在する (12・12%)	様々な観点から、具体的な改良の必要な箇所が存在する (8・8%)	<ul style="list-style-type: none"> ・詳細項目、基準の参考にできるような別紙があればさらに評価しやすい ・「自主性」と取り組みの「積極性」の言葉の使い分けなどそのような問題箇所の見直しをお願いしたい ・具体的な項目、MMT、ROMなどをチェックする場所があってもいい
	今後の継続運用を見据え、様式の改訂が必須である (4・4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・誰が行っても同じような指導の指標が明確になるようなものを目指してほしい ・今後も改善に取り組み、よい評価用紙となることを期待する
内省への応用や、斬新な活用法は実習教育に新たな「可能性」をもたらす (9・9%)	学生・実習指導者ともに教育ツールとして柔軟な応用ができる (5・5%)	<ul style="list-style-type: none"> ・バイザーとして自らの指導法の振り返りにも役立つ ・他指導者間でも使用してみることで、各々の考えを吸収できる ・実際にクリニカルクラークシップのチェックリストと併用ができて良かった
	成績報告書としての用途のみならず斬新な活用法が存在する (4・4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックを他の養成校とも共通して利用すれば評価・到達内容に一貫性を持たすことができそう ・新人（職員）の評価、指導にも使用できそう

められている目標や基準には表現の不明瞭さや曖昧さが存在する」などと、各基準に定めた記述の意味内容を理解しにくいといった内容が多く抽出された。

まず、実習指導者が様式に記入する際に感じる不慣れや戸惑いは、評価基準と評価尺度が枠で囲まれた記述語で全て構成されるループリックの見慣れない様式に加え、指導者それぞれが自らの判断で5段階の中から到達度に近い値を選択していた従来の様式から、基準の詳細が具体的に記述された様式に変更された点にあると考えられる。これまでの、各評価項目に対して定められた大まかな評価尺度の値を自らで判断し、選定していた評価方法が、ループリックを用いた評価方法では、はじめから評価項目に対する評価尺度それぞれの基準が具体的に記述して定められており、その判断に関わる加筆を実習指導者自らも加えなければならないといった使用方法の異なりが、不慣れや戸惑いを感じさせた要因ではないだろうか。

次に、表現の不明瞭さや曖昧さに関しては、開発したループリックに一つの評価尺度の枠内に多数の要素を含んだ記述で基準が作成されている箇所が存在した。また、到達度の判断目安は、平均的な到達度（4段階中2段階目）を「継続指導すれば改善する」、最も低い到達度（4段階中1段階目）を「継続指導しても変化がみられないか見込めない」という基準で作成した。しかし一部の評価項目に、この解釈基準と異なる箇所が存在し、実習指導者に尺度基準の曖昧さを感じさせてしまったことが考えられる。

これらより、使用の際の不便や戸惑い、表現の曖昧さに対しては実習成績報告書の様式自体にループリックの趣旨と記入方法の確認ができる注釈を加えることと、1つの評価基準に、可能な限り多くの要素を含んだ表現を用いないこと、評価尺度間の解釈と到達度を明確にできる基準内容を再考する必要があることがわかった。加えて、「従来の実習成績報告書の評価の方法が異なる様式であること」や、「実際に学生を担当して教育実践を行う理学療法士と、会議の参加者である実習施設の代表者とは、実習教育の担当が異なってしまう場合がある」などの意見に対して、ループリック評価の趣旨や使用方法を含んだ本校の実習教育評価の概要を、会議参加者のみではなく実習教育に携わる全ての理学療法士に理解してもらえるような実習施設側に対する促しも必要であることもわかった。

さらに、改訂へ向けて着目したい興味深い知見が二つ存在する。一つ目は、学生の状態を客観的な表現で容易に可視化できるというループリックの長所を活かし、今回、学生の間評価と最終評価の結果ループリックに書き込める工夫をして、実習期間内における学生の成長を「みえる化」ができる使用方法の推奨を行った。しかし、最終学年時に履修する長期臨床実習の様式から開発を

手したことも影響して、短い期間となる見学実習や検査測定実習においては、短期間で学生の現状と成長度の可視化まで評価することは困難だという指摘が得られた。これらは短期間の実習で用いるループリックの様式の構成や、使用方法の変更などの再検討が必要なことを明らかにした。

二つ目は、開発者側はループリックに示した枠内の評価基準に具体的な表現を用い、その可視化から、公平で客観性の高い成績報告書をねらいとしたが、その具体的な表現こそが成績評価の判断を誘導されているように感じた実習指導者の意見が存在した。これらは、養成校の定めた評価基準と実習指導者の考える評価の判断基準との間になんらかの差異が存在することを表し、評価基準に対する養成校と実習指導者の認識を、改めて別に検証する必要があることがわかった。したがって、今後もこれらの検討を継続することは、養成校と実習指導者がお互いの考える目標や基準に対する認識のズレを明確にして修正を繰り返すことができ、評価の内容的妥当性を高めることにつながると考える。よって、今後の指導者会議においても、目標と基準に関する実習指導者との意見交換を積極的に行い、改訂の際は、全ての評価項目や基準内に使用している用語の定義と、文章の意味内容を考慮した用語の採用や使い分けなどを慎重に行う必要があることがわかった。

カテゴリ3は、これまでに述べたカテゴリ1の様式の「利点」とカテゴリ2の様式の「課題」を踏まえ、実習指導者の提案する「具体的な要改善箇所」として抽出されたものがまとめられた。したがって、カテゴリ3の結果に対しては、具体的な対策を考案することとした。まず、サブ・カテゴリの「様々な観点から具体的な改良の必要な箇所が存在する」からは、具体的に「関節可動域検査」や「筋力検査」などの特に精神運動領域に関連する詳細記述ができるように、評価項目数を増やす提案や基準内容で使用されている用語の使い分けを見直してほしいなどが存在した。評価項目数を増やしてほしいという提案に対しては、評価の客観性を向上させることができるという一般化信頼性の先行研究²³⁾で、評価者数や評価項目数を充実化させることの有用性も立証されている。しかし、本校の実習成績報告書の様式は、日常の理学療法業務の傍ら、学生の実習教育を担わざるを得ない多忙な実習指導者⁸⁻²⁴⁾の負担を増幅させないことを開発時の目的の一つとしているため、評価項目数は増やさずにA3で1枚の様式のままで、ループリックを補填する二つの別様式の作成を検討する対策を考案した。一つ目は、実習指導者がループリックを使用して基準の解釈と学生の到達度判定を行う際に、判断基準の確認に使用できる詳細をまとめた基準一覧表を作成し、実習指導の指針と各実習の要項が書かれた本校作成の臨床実習マニュアル(A4サイズ65ページで構成)への添付を行う。

基準一覧表は、一般的な臨床実習の教育目標と教育目標⁸⁾を参考に臨床実習の目的と、その教育目標と教育評価についてを述べ、次いで、本校の定める教育目標とルーブリックを使用した教育評価の指針と方法、評価基準の在り方と成績判定の方法を記す。内容詳細は、15項目あるそれぞれの評価項目の趣旨と到達目標を目指すために必要な具体的指導や判断の際に、確認ができる解説を記す。また、各評価尺度の判定をする際の迷いを最小限にできるように、基準中に使用している用語の定義を詳細に解説し、実習指導者が、実習期間中の学生指導において、目標や基準の詳細やその判断に関する疑問を抱いた際などに、適宜手に取って確認できるものを作成する。

二つ目は、現在、実習中に経験した技術を適宜記録することを目的として、クリニカル・クラークシップにおいて使用されるチェックリスト²⁵⁾を参考に、本校で独自に作成して運用している理学療法技術経験チェックリストとルーブリックとを関連付けた新しい使用方法を再検討することでこれらの提案に対する解決の目途を立てた。

カテゴリ4には、今後のルーブリックの「可能性」をまとめた、主に指導方法を選ばない汎用性の高い様式であること、評価様式の用途に加え、指導者自身の振り返りや新人教育への応用などの、ルーブリックの飛躍した活用法を考案、実践できてよかったという感想も存在した。筆者らは、先行研究においてルーブリックが実習教育の質の可視化と教育水準の担保・成績報告書自体を学習活動に活用できること、その汎用性の高さといったルーブリックの3つの可能性に言及していた¹⁷⁾。カテゴリ4では、その3つの可能性と一致する実習指導者側の知見が多数抽出され、運用を通して、臨床実習指導者もルーブリックの様式で行う実習教育評価という新しい取り組みに前向きで、かつ養成校も想定していなかった実習指導者ならではの活用法を考案するまでに至ったと解釈できる。さらに、実習指導者は養成校が計画している様式の改訂に関しても積極的に捉えており、将来的には「ルーブリックを他の養成校同士で共用することで、評価、到達内容に一貫性を持たせることができる」という可能性までを指摘した先験的な内容も存在し、改めて、実習指導者側も実習教育に対する多角的な視点での連携教育の必要性を感じていることが明らかとなった。

近年、全国の養成校においてもルーブリックの教育実践への導入は積極的で、その報告や検討は積極的に行われている。しかし、現状の理学療法士養成体系では、冒頭で述べた多様化した課題に加え、大学、専門学校などの養成機関種の違いや3年課程と4年課程の就業年数の違い^{8,26)}、養成校ごとの実習期間の違い⁸⁾などが存在し、実習教育に関連する教育目標や評価基準、評価方法や判断基準の統一化を図ることは容易ではない。

多くの研究者は、かねてより養成校と実習指導者の共同による教育的取り組みを推奨^{12,13)}している。重要なことは目標や基準、指導方法の統一化のみに重きをおくのではなく、各校が養成校と実習施設との関係性や条件などを含んだ学校ならではの臨床実習の教育目標と基準、指導方針を実習施設と協同して検討し合えるところにあるのではないだろうか。

今回の臨床実習ルーブリックの研究を通じた養成校と実習指導者との教育連携は、様式の改定のための有益な知見を得ることができた。臨床実習における教育評価の本質をとらえるためには、改めて実習における成績評価の価値を何においてルーブリックを開発し、運用するかを養成校と実習指導者とがあらゆる形で対話を通して振り返る取り組みを継続することの重要性もわかった。また、これらの取り組みは、今後ルーブリックがそれぞれの養成校独自による開発ながらも、成績評価様式として妥当な様式で、かつ客観性や実用性の高いものをつくりだせると考えている。

利益相反 本論文に関して開示すべき利益相反はない。

謝辞 本校のルーブリックの開発から実習指導、成績報告書の運用にわたり、ご協力下さっている実習指導者を中心とする関係者の皆様方に感謝申し上げます。加えて、これからルーブリックの導入を検討している養成校や、すでに何らかの教育評価様式にルーブリックを導入して運用を実施している機関が、本研究による知見をその開発や改良・改訂に取り組む際の一助として頂ければ幸いです。

引用文献

- 1) Stevens DD, Levi AJ: 大学教員のためのルーブリック評価入門。佐藤浩章(監訳)、玉川大学出版部、東京、2014、p2.
- 2) 松下佳代: パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—。日本標準、東京、2007、p10.
- 3) 沖 裕貴: 大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—。立命館高等教育研究、2014、14: 71-90.
- 4) 玉利 誠、宮崎至恵、松崎秀隆・他: 臨床実習におけるルーブリックを用いた認知スキル指導の提案—クリニカル・クラークシップの普及に向けて—。柳川リハビリテーション学院・福岡国際医療福祉学院紀要、2015、11: 18-23.
- 5) 四元祐子、藤田賢太郎、山下喬之: ルーブリックを用いたグループディスカッション評価方法の検討。九州理学療法士・作業療法士合同学会誌、2016: 256-256.
- 6) 岡山加奈、荻 あや子、高林範子・他: 既存の基礎看護学実習評価表の課題とルーブリックを用いた評価表の提案。岡山県立大学保健福祉学部紀要、2014、21: 9-16.
- 7) 文部科学省: 大学設置基準第六章教育課程第二十五条の二。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/053/

- gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2012/10/30/1325943_02_3_1.pdf (閲覧日2017年12月25日).
- 8) 奈良 勲：理学療法学教育論. 医歯薬出版, 東京, 2004, p151.
 - 9) 宮本謙三, 宅間 豊, 井上佳和：臨床実習成績に対する妥当性の認識と帰属要因の関連. 理学療法ジャーナル, 2002, 36: 883-887.
 - 10) 中川法一, 青山 誠, 松葉好子・他：臨床教育の検証と新たな方向性. 理学療法学, 2013, 40: 151-155.
 - 11) 金山浩基, 座間味知彦, 名取悟美：臨床実習成績とバイザーの総合判定の誤差について. リハビリテーション教育研究, 2017, 22: 214-215.
 - 12) 楠本正順, 吉村 修, 濱田輝一・他：臨床実習指導者への意識調査—理学療法教育をどのように学んでいるか—. 第48回日本理学療法学会大会抄録, 2013, 40 (Suppl 2): 6.
 - 13) 吉村 修, 楠本正順, 濱田輝一・他：よりよい臨床実習指導体制を目指した実態調査報告—指導で困ったことについて—. 第50回日本理学療法学会大会抄録, 2015, 42 (Suppl 2): 758.
 - 14) 久保田まり, 水間正澄：医療系臨床実習指導の重要性に関する指導者側の認知. 医学教育, 2002, 33: 467-474.
 - 15) 熊野貴紀, 谷 浩明：全国理学療法士養成校の臨床実習形態についてのアンケート調査. 理学療法科学, 2015, 30: 503-508.
 - 16) 吉元洋一：理学療法学教育の現状と課題. 理学療法学, 2015, 42: 651-652.
 - 17) 山下喬之, 田口 光, 長津秀文・他：ループリックで理学療法士養成課程における臨床実習の成績評価が生まれかわる. 理学療法科学, 2016, 31: 915-923.
 - 18) 公益社団法人日本理学療法士協会：理学療法教育ガイドライン, 第1版. 公益社団法人日本理学療法士協会, 東京, 2009.
 - 19) 公益社団法人日本理学療法士協会：臨床実習教育の手引き, 第5版. 公益社団法人日本理学療法士協会, 東京, 2007, pp15-20.
 - 20) 山口陽弘：教育評価におけるループリック作成のためのいくつかのヒントの提案—パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して—. 群馬大学教育学部紀要, 人文社会学編, 2013, 62: 157-168.
 - 21) 舟島なをみ：質的研究への挑戦, 第2版. 医学書院, 東京, 2007, pp41-79.
 - 22) Scott WA: Reliability of content analysis. The case of nominal scale coding. Public Opin Q, 1955, 19: 312-315.
 - 23) 山口陽弘, 清水真紀：英語学習者のための音読テストの信頼性の検討—一般化可能性理論の適用と第二言語習得への示唆—. 群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, 2009, 58: 155-168.
 - 24) 小林 賢：臨床における教育方法論—効果的な臨床実習の進め方—. 理学療法学, 2014, 41: 203-206.
 - 25) 中川法一：セラピスト教育のための臨床・クラークシップのすすめ, 第2版. 三輪書店, 東京, 2007, p297.
 - 26) 奈良 勲：理学療法の本質を問う. 医学書院, 東京, 2002, pp95-102.